

マルクスの表式のもつ意味

「表式の使命をはっきり理解していない」のは、むしろトゥガン・バラノフスキー氏で、彼は表式が「結論を証明する」（同所）と考えているのだ。表式は、そのものとしてはなにも証明することができない。表式は、過程の個々の要素が理論的に解明されているとき、その過程を図解することができるにすぎない。

第四巻 市場理論の問題への覚え書 P60

マルクスの実現理論とマルクスの理論の科学的価値

マルクスの実現理論とは社会的総資本の再生産と流通の分析のことである……………

私が、実現理論を社会的総資本の再生産と流通との過程の分析とは理解しないで、それを、生産物は生産物と交換されるというだけの理論、生産と消費とのあいだの調和を説く理論と理解しているとは、ストルーヴェはいったいどうして考えついたのだろうか？ 私のもろもろの論文を検討しても、ストルーヴェは、私が生産理論を第二の意味に理解していたなどとはいえないだろう。なぜなら、私は、実現理論をほかならぬ第一の意味に理解しているということを、率直に、また明確に述べておいたからである。論文『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』のなかの、スミスとシスモンディの誤りの解明にあてた節では、私はつぎのように述べている。「問題はまさに、実現が、すなわち社会的生産物のすべての部分の補填がどのようにして行われるか、ということにある。だから、社会的資本と社会的所得とについて、あるいは同じことであるが、資本主義社会での生産物の実現について考えるさいの出発点となるものは……生産手段と消費資料との区分でなければならない」（『試論』17ページ）〔第二巻 134~135 ページ〕。「実現の問題は、価値および物材的形態の点で、社会的生産物のすべての部分の補填を分析することにある」（前掲書 26 ページ）〔146 ページ〕。ストルーヴェが——あたかも私に反対しているかのようにして——われわれに興味あるこの理論は、「そのような実現が、実際に行われるものであるかぎり、この実現の機構……をしめしている」（『ナウチノエ・オボズレーニエ』62 ページ）というとき、彼も私と同じことをいっているのではないだろうか？ 私が、実現は「ただ困難のなかでのみ、資本主義の成長につれてますます強くなるたえまない動揺のなかでのみ、また……熱狂的な競争のなかでのみ」（『試論』27ページ）〔147 ページ〕行われるというとき、私は、私の擁護しているその実現理論に矛盾しているだろうか？ 私が、ナロードニキの理論は「実現についての無理解をしめすものであるばかりでなく、この実現に固有な諸矛盾についての、きわめて表面的な理解をもちふくんでいる」（前掲書 26~27 ページ）〔146 ページ〕というとき、私は、私が擁護しているその実現理論に矛盾しているだろうか？ 消費資料によるよりも、むしろ生産手段によって行われる生産物の実現は、「もちろん、矛盾である。しかし、それは、まさに実際におきている矛盾であり、資本主義の本質そのものから出てくる矛盾である」（前掲書 24 ページ）〔143 ページ〕、そしてこの矛盾は「資本主義の歴史的使命とその特有な社会構造とに完全照応している。前者は」（すなわち、使命は）「まさに、社会の生産力の発展（生産のための生産）にあるが、後者は」（すなわち、資本主義の社会構造は）「住民大衆によるそれら生産力の利用を排除している」（前掲書 20 ページ）〔138 ページ〕というとき、私は、私の擁護してい

るその実現理論に矛盾しているだろうか？……………

マルクスの理論の科学的価値は、その理論が社会的総資本の再生産と流通との過程を解明したことにある。さらにまた、マルクスの理論は、生産の巨大な増加がそれに照応する人民の消費の増加を伴わないという、資本主義に固有な矛盾が、どのように実現されるか、ということをもしめした。だから、マルクスの理論は、ブルジョア的＝弁護論的な理論を復活（ストルーヴェはこう夢想したのだが）しないばかりでなく、逆に、**弁護論にたいするもっとも強力な武器をあたえているのである**。この理論からは、社会的総資本の理想的に円滑な、そして均衡のとれた再生産と流通とが行われるばあいでは、**さえ**、生産の増加と消費の制限された限界とのあいだの矛盾は不可避であるという結論が出てくる。**そのうえ**実際には、実現の過程は、理想的に円滑な均衡をもってすすむのではなくて、ただ「困難」、「動揺」、「恐慌」、等々のなかでのみすすむのである。

さらにまた、マルクスの実現理論は、弁護論にたいしてばかりでなく、資本主義の小市民的＝反動的な批判にたいしても、もっとも強力な武器をあたえる。ほかならぬこのような反動的な資本主義批判を、わが国のナロードニキは、そのまちがった実現理論によってうらづけようとつとめたのである。実現のマルクスの理解は、資本主義の歴史的進歩性（生産手段の、したがってまた社会の生産力の発展）を不可避的にみとめることになるが、しかしこのことによって、資本主義の歴史的に経過的な性格をぬりつぶさないばかりか、かえってその性格を明らかにするのである。

第四巻 ふたたび実現理論の問題によせて P85~87,91

——理論的な経済学的分析は総じて傾向しかとりあつかうことができない——

第四巻 農業における資本主義 P122

コメント

資本主義の社会構造が、住民大衆による生産力の利用を排除しているもつとで、社会の生産力の発展を図るためには、消費資料によるよりも、むしろ生産手段によって行われる生産物の実現が法則性をもつばかりでなく必要性をもち、これらは資本主義の歴史的使命とその特有な社会構造とに完全照応している。人民の消費の増加を伴わない生産の巨大な増加は主として生産手段の拡大を通じておこなわれる。マルクスの理論の科学的価値は、剰余価値を発見し、社会的総資本の再生産と流通とのこれらの過程を解明したことであり、マルクスの再生産表式はそのことを図解しており、資本主義社会は生産のための生産を続け、マグロのように全力で走り続けなければならない社会であることを示し、資本主義の歴史的進歩性と資本主義の歴史的に経過的な性格とを示した。

「生産と消費」の矛盾だけに目を奪われる一知半解の「マルクス」主義者は、社会的生産と私的取得（資本の本質）という資本主義の「基本的な矛盾」を忘れ、「消費」を増やせば資本主義の矛盾は解消されると思い込んでいる。